

# とも 戦友を背にして：

陸修会に負われて

高崎 禎夫 広幼48

兵の歩みの 頼もしさ

この「すまぬすまぬ」と言っているのが、広幼の私です。その私を負ぶってくださっているのが、皆さん、陸修会の皆さんです。

私は、広島陸軍幼年学校48期で、終戦時は、2年生でした。14歳でした。今は91歳、広島県偕行会副会長です。同会の今年の「晩夏の集い」の記念写真の、遅ればせの送付時に、私は、そのときの参集者に宛てた手紙の中で、次のように書きました。

私は、偕行会の皆さんを、この上なく、「頼もしく」思っています。

最近最大の、われわれの課題である「陸修会設立と偕行社」の合同問題については、私は、現編集委員長・柴田幹雄さんの、上と同名の9・10月号のご文章と、11・12月号の「偕行社とは」のご文章に、全面的に賛成し、そのご見識に感服しています。

今後とも、私は、広島県偕行会の皆様とご一緒に、「偕（とも）」に行きたい」と願っております。

この「合同問題」については、私は、まことに勝手ながら、軍国歌謡（「軍歌」ではありません）「麦と兵隊」の、特に2番を想起します。

なお、蛇足ながら、幼年学校のこのことについて、若干、書かせていただきます。

世界の幼年学校は、早くも1682年に、フランスで生まれました。あのナポレオンが、1779年にブリエンヌ幼年学校に入ったときは、9歳でした。

原爆を受けて今はない、広幼の校庭に「若櫻の碑」というものがありました。これは、高千穂丸で遭難した3名の広幼46期生の追悼の碑です。高千穂丸は、内地と台湾を結ぶ内台連絡船で、昭和18年3月19日、アメリカ潜水艦の魚雷攻撃によって基隆沖70海里で沈没しました。彼ら3名は、幼児や老人・婦人を次々と

2、戦友を背にして 道なき道を  
往けば戦野は 夜の雨  
すまぬすまぬを 背中聞けば  
馬鹿をいうなど また進む

2、戦友を背にして 道なき道を  
往けば戦野は 夜の雨  
すまぬすまぬを 背中聞けば  
馬鹿をいうなど また進む

助けて、数少ないボートや筏に運び、人々の命を優先して、自らは、歌を雄々しく歌いながら、独力で泳いでいつて、力尽きたのです。彼らは幼年学校教育を受けてまだ1年目の14、15歳の少年です。しかし、私は、彼らこそ日頃受けた幼年学校教育の具現者、幼年学校生徒の典型だと思っています。

私は、「広島陸軍幼年学校って、どんな学校ですか」と問われたら、やましたともゆき「山下奉文や阿南惟幾あなみこれちかのような高名な偉い大将」を生み出した学校、と言うよりは、「人々を救うためにわが身を捧げた『若櫻』のような生徒」を生み出した学校です、と答えたいと思っています。